

~~~~~  
論 説  
~~~~~

スペイン内戦の記憶, その過去と現在: マドリード におけるカトリック教区教会保有の石板プレートに 関する一考察

渡 邊 千 秋*

はじめに

1975 年 11 月にフランコが死亡すると, スペインでは, 内戦の勝者が主体となって構築した独裁体制をどのように解体し民主移行を遂げるかが改めて国民的な課題となった。民主主義体制の脆弱な基盤をまえに, 体制移行期の主要な政治的アクターは, 内戦・独裁による抑圧の記憶を呼び起こすことで社会が動揺するのを避けようとした。そうすることにより民主主義体制への平和的移行が可能になるという信念に基づいて, 過去の傷口に触れるのを避けたのである。以降, 確かに段階的にフランコ独裁体制時代の政治犯への恩赦や名誉回復, 賠償などは行われていったのだが, それは十分な処置とはならなかった¹⁾。その後, 1996 年に国民党アスナル政権が誕生し, 翌年には人文学系, なかでも歴史科目に関して現代を軽視するかのような教育改革が行われることで, まず研究者のあいだで危機感が高まり, 内戦・独裁体制という国民的トラウマと向き

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) フランコ体制末期から社会労働党政権に至るまでの, 内戦をいかに記録するか, また内戦敗者の名誉回復をどうするか, といった国民的課題をめぐる政治的動向・言説のゆくえについては多くの書籍が出版されている。中でも状況を端的に解説したパイオニアとして, アギラル・フェルナンデスの文献は有用である。P. Aguilar Fernández, *Políticas de la memoria y memorias de la política*, Madrid, Alianza Editorial, 2008.

合う必要性が喚起されたのだった。2004年3月に政権交代が起こると、社会労働党のロドリゲス・サバテロ首相のもとで、国の責任において内戦関連の資料保存を義務づけ、その敗者の歩みをも記録する方針が打ち出された。内戦勃発70年にあたる2006年は「歴史的記憶の年」と規定され、関連研究書が数多く出版された²⁾。また、サラマンカのスペイン内戦総合資料館が歴史的記憶資料センターに改組されたのもこの年をきっかけとしてのことであった³⁾。

このように、スペイン内戦が集合的記憶としての研究対象となったのは「最近」の出来事であり、内戦の記憶と歴史の間をめぐって行き来する研究者の自己省察・批判は始まったばかりである。他方、研究者は、上述した政治的アプローチの結果として人々の心に呼び起こされた内戦をめぐる記憶が、静かなる社会的葛藤とでも呼ぶべき状況を生んでいる現実にも目を向けねばなるまい。その葛藤が生まれた発端のひとつは独裁体制に関連する記念碑をどう扱うか、ということにあった。2007年12月にスペイン議会が承認したいわゆる「歴史的記憶法」は、軍事蜂起・内戦・独裁による弾圧等の称揚を避けるため、行政側はそれらを記念する盾・記章・プレート他の事物を撤去するのに適切な方策をとるべしとし、既に実行されつつあった撤去作業を加速させた。今日まで、一連の処置として、フランコ独裁を称揚すると判断されたさまざまな記念碑の撤去が行われている。しかしながら、撤去に及んだ記念碑は、公的な場にある行政機関などの所有物が主である。行政が干渉できない「私的な場」、たとえば宗教団体としてのローマ・カトリック教会（以下、カトリック教会と記す）の関連施設に設置された記念碑をめぐっては、撤去を進めようとする側と維持しよ

2) 内戦そしてフランコ独裁の抑圧の記憶に関する研究状況を総括するには、以下の文献を特に参照されよ。J. Ruiz, “Seventy Years on: Historians and Repression During and After the Spanish Civil War”, in *Journal of Contemporary History*, n. 44-3, 2009, pp. 449-472; J. Cuesta Bustillo, *La odisea de la memoria. Historia de la memoria en España. Siglo XX*, Madrid, Alianza Editorial, 2008.

3) ここに記した動向の詳細については以下を参照せよ。P. Ruiz Torres, “Los discursos de la memoria histórica en España”, en J. Aróstegui y S. Gálvez (eds.), *Generaciones y memoria de la represión franquista*, València, Universitat de València, 2010, pp. 39-73.

うとする側との対立が改めて顕在化することとなった⁴⁾。

カトリック教会内部にもいろいろな意見があり、内戦の勝者を称えるような記念碑の撤去に踏み切った教区も存在する。それでは、撤去しないとする派の論拠はどこにあるのか⁵⁾。記念碑維持に執着するその姿勢には、P. ノラの述べる通り、公的な場と私的な場の対置が存在し、くわえて、みずからに、そしてみずからのアイデンティティに閉じこもり、みずからの名に凝縮されている極端な場としての記憶の場、そしてまた構成要素どうしの複雑な関係がある記憶の場をなんとかして維持しようとする意志の力を感じる⁶⁾。

本稿では、マドリード市の教区教会敷地内に設置された内戦での戦没者を祈念する石板プレートを対象とし、それらに内在するスペイン内戦の記憶としての象徴的意味とその現代的機能を考察したい。内戦に関する新たな想起と忘却が絶え間なく繰り返されるなかにあつて、カトリック教会は記念碑という記憶の場を通じて内なる戦没者をいかに祈念しようとしているのか。民主化以降、国家宗教としての地位を失ったカトリック教会が、スペイン内戦の集合的記憶をどのように再構築しようとしているのかを省察することが本稿の目的である。

1. カトリック教会の建造物としての内戦記念碑、その由来

スペインの首都マドリードは、内戦末期に至るまで反乱軍に抵抗し続けた共

4) たとえばアビラ県のペドロ・ベルナルドという町では、2008年夏に、一部の町民が、教会堂の壁にかけられたフランコ陣営側の死者を祈念するプレートを取り外すという町議会の決定に対して教区司祭の賛同を得た上で反対し、その撤去作業を妨害した。A. Grimaldos, *La Iglesia en España, 1977-2008*, Barcelona, Ediciones Península, 2008, p. 237.

5) この状況は「カトリック教会は21世紀の今日、内戦の記憶をいきいきと保持する唯一の団体であり、記念セレモニーやモニュメント以上のものとして自分たちの殉教者の記憶を永続化し続ける団体である。」との言に端的に表現される。J. Casanova, “Primera Parte. Una dictadura de cuarenta años”, en J. Casanova (ed.), *Morir, matar, sobrevivir. La violencia en la dictadura de Franco*, Barcelona, Crítica, 2002, p. 46.

6) P. ノラ「序論 記憶と歴史のはざまに」、P. ノラ編『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史(対立) 1』岩波書店、2003年、特に53-55頁を参照されたい。

共和国陣営の最重要拠点のひとつであった⁷⁾。1936年7月18日、モロッコでの軍事蜂起のニュースがマドリード市民に伝わると、共和国政府によって19日には労働者民兵に武器が配布され、それ以降、マドリードの人々は「やつらを通すな！」のスローガンのもとに、2年8カ月の間フランコ反乱軍に抵抗し、戦闘を継続した。社会主義者・共産主義者・アナキスト等左派の民兵組織を中心とするマドリードの共和国陣営は、都を死守することに力を注いだ。1936年11月、戦禍を避けて首都機能がバレンシアへ移されたあとも、マドリードの人々は長期にわたる包囲戦を経験したのであった。

しかし当然のことながら、この都市の住人全てが共和国陣営を支持していたわけではなかった。フランコ陣営を支持しつつも、共和国陣営側による殺害を免れるため逃亡生活を続ける者、沈黙を守る者、第五列(Quinta Columna)と呼ばれるフランコ陣営側のスパイとして働く者等がいた。共和国陣営は自らの側に取り込むことのできない人々を内包しながら、マドリードを堅持するための包囲戦を戦うことを余儀なくされた。それゆえ、内戦初期数カ月においては特に、チェカと名づけられた秘密警察組織を駆使しながら「連行(saca)」「散歩(paseo)」と呼ばれる秘密裏に人々を連れ出して殺害する方法を用いて、敵を発見し殲滅することに力を注いだのである⁸⁾。先行研究が明らかにするように、マドリードで共和国陣営がおこなった反対者への弾圧は熾烈を極めた。家族の目の前で連行され、投獄・殺害された者、また連行後そのまま裁判を受けることもなく殺害された者はおびただしい数にのぼる。戦後、再び国家宗教となったローマ・カトリック教は、殺害された人々の家族が服した喪の悲しみを受け止め癒す役割を担う責任を負った。そこでカトリック教会はスペイン各地で荘厳

7) 北部戦線がフランコ陣営によって掌握された後には、マドリード、バレンシア、バルセロナが共和国陣営側の主要都市であった。

8) このような共和国陣営の戦時暴力がコントロールできない状況は、1937年8月6日の勅令によって、軍情報サービス(Servicio de Inteligencia Militar)が創設されたことで変化し、暴力は減少した、とされる。J. L. Ledesma, “Una retaguardia al rojo. Las violencias en la zona republicana”, en F. Espinosa Maestre (ed.), *Violencia roja y azul. España, 1936-1950*, Barcelona, Crítica, 2010, pp. 242-243.

ミサを執り行い、人々の力添えを得て、戦争で没した者たちへの鎮魂の祈りを捧げたのである。しかし祀る対象となったのは、主に共和国陣営によって殺害された人々であった。

スペイン・カトリック教会聖職者の多数派は、第二共和政による一連の反宗教的政策に由来して、内戦開始当初からフランコ陣営を支持し、共和国陣営を支持したのは少数派であった⁹⁾。1937年7月の首都大司教会議による集団司牧書簡の出版は、カトリック教会のフランコ陣営支持の正当性をスペイン国内外にアピールするのに役立った¹⁰⁾。また、内戦初期に主に共和国陣営で起こったカトリック教会聖職者の大量殺害の現実には、カトリック教会のネットワークを通じて国際的な世論をフランコ陣営支持へと向けるのに大きな役割を果たしたのだった。

マドリード市では、既に第二共和政期からカトリック教会は民衆による教会焼き討ちを経験していたが、内戦勃発とともに改めて数多くの教会堂に火が放たれ、聖職者をはじめとする教会関係者が多数暗殺されるといった悲惨な状況に再度見舞われることとなった¹¹⁾。カトリック教会の墓地は暴かれ、また芸術的価値の高い宗教的物品等は略奪の被害にあい、焼き討ちを免れた教会建造物は共和国陣営側の施設として使用されるなど、教会は本来の信仰の共同体としての機能を果たすことができなくなった。カトリック教会が受けた人的・物的被害は甚大であった。そして運よく弾圧を生き延びた聖職者や修道女は、包

9) 共和国陣営を支持したローマ・カトリック教の聖職者や平信徒については、以下の文献を参照せよ。彼らは少数派であり、亡命生活を余儀なくされた平信徒、聖職者でありながらもフランコ陣営によって処刑された人々等、その人生は波乱に満ちていた。D. Arasa, *Católicos del bando rojo*, Barcelona, Styria, 2009.

10) 署名を拒否した高位聖職者は、地域主義の色彩が強い司教区での司牧を行っていたタラゴナ大司教ビダル・イ・バラケルなど、例外的な少数派であった。

11) 7月19日日曜朝のミサの後、教会の大部分は通常であれば主日として一番活発に動きのある時間帯にその門を閉じたが、同日午後には発砲、聖職者の逮捕、教会堂への放火、略奪などが横行した。R. C. Cancio Fernández, *Guerra civil y tribunales: De los jurados populares a la justicia franquista (1936-1939)*, Cáceres, Universidad de Extremadura, 2007, p. 184.

困戦を耐えながら、地下活動としての宗教実践を密に行う以外になかったのである¹²⁾。

戦闘がフランコの勝利宣言によって一応の終結を見、マドリードが「解放された」のは1939年3月末のことである。しかしそのはるか以前から、カトリック教会はみずからの受けた被害を省みつつ、あくまで聖職者を中心としたものではあるが「内なる死者」を祈念する方法を模索しはじめていた。そのようなカトリック教会による鎮魂は、宗教を敵視し反教権的な政策をとった共和国陣営を根源的悪とみなす言説に支配されていた¹³⁾。そして宗教的儀式には、フランコ陣営を正当化する政治的意味が常に付与された。

一方、1937年4月、伝達主義者であるカルリスタをはじめとする諸勢力とファランヘ党を合併し、すべての民兵をフランコの指揮下にあるファランヘ党に統合するための統一令が發布された。そうしてフランコは、カトリック性をスペインの国民性の根幹に据えた。フランコをはじめ内戦後の新国家建設を夢見る人々は、実は多様な政治的要素を内包するフランコ陣営を統合するためのひとつの手段として、戦没者を祈念する必要性があると認識していた。とはいえ、あくまで主導権は政治権力の側にあった。フランコは、カトリック教会の指導によってではなく援助によってこそ勝利がもたらされると説いた¹⁴⁾。これに対し、教会高位聖職者は人々が内戦を戦い続けることができる理由には伝統主義に基づく宗教的感情があるとして、統一令によりカトリック性を前面に出す伝統主義者ではなくファシズムの影響を強く受けたファランヘ党が優勢にな

12) マドリード市内の教会がうけた人的・物的被害や内戦下における宗教的実践の現状については、以下を参照せよ。J. L. Alfaya, *Como un río de fuego. Madrid. 1936*, Barcelona, Ediciones Internacionales Universitarias, 1998.

13) たとえばそのような現状は、死者を祈念するために出された死亡広告、追悼文、記念碑の文言のなかに再生産される言説に読み取ることができる。「神と祖国の敵」「赤の支配」「マルクス主義者の暴徒」といった文言で共和国陣営側を表現していることに明らかである。渡邊千秋「スペイン内戦を死亡広告から考える：カトリック的青年層の個人史再考の試み」『青山国際政経論集』n. 83, 2010, pp. 65-88.

14) A. Elorza, “El franquismo, un proyecto de religión política”, en J. Tusell, E. Gentile y G. di Febo (eds.), *Fascismo y franquismo. Cara a cara*, Madrid, Biblioteca Nueva, 2004, p. 73.

ることに対し、少なからず危惧を抱いてもいた¹⁵⁾。

このようにある意味曖昧な政治と宗教の関係が、内戦における戦没者の追悼をめぐってはあらたな波紋を広げることとなる。1937年11月に開催されたスペイン・カトリック首都大司教会議は、聖職者や平信徒が「よきカトリック」としての信仰のゆえに暴力的に殺害されているとしてこれを弾劾するとともに、殺害されたそれらの人々の大部分は英雄的に死んだ殉教者であると称賛した。その上で、教会は彼らの英雄的な死を祈念する必要がある、特に死亡した聖職者、なかでも司教などの高位聖職者に関しては特にその死を公に知らしめるべし、とした。そのために、各司教区が適切と判断する時期に、殺害された聖職者の人生の歩みを出版物として世に出すことや、彼らの葬儀を執り行うことを決定したのである。くわえて、聖職者のみならず、信仰そして祖国防衛のために落命したすべての者たちのために、スペインの全教会において追悼式を行うことで合意したのであった¹⁶⁾。宗教組織としてのカトリック教会の思惑とフランコ陣営側の政治的思惑は合致した。しかし新国家は、その政治システムが徐々に安定してくるにしたがってファシスト的な方式を典礼に取り入れようとした。1938年2月、祖国を記念する方法に関する委員会が設置され、クリスチャンにとっては非常に重要な十字架というシンボルにくわえ、その他の建築物・記念碑・石板プレート等を建造するにあたって国家レベルでの統一的基準を制定する運びとなった¹⁷⁾。

同年10月12日、ファランヘ党副書記長のベマルティンがスペイン首座大司

15) “Informe del cardenal Gomá al cardenal Pacelli acerca del reconocimiento diplomático del Gobierno de Franco por parte de la Santa Sede, 7 abril 1937”, en J. Andrés-Gallego y A. M. Pazos (eds.), *Archivo Gomá. Documentos de la Guerra Civil*, v. 5, Madrid, CSIC, 2003, pp. 63–66; “Informe político del cardenal Gomá al cardenal Pacelli, 24 abril 1937”, en *Ibid.*, pp. 233–238.

16) “XXII. Acta de la Conferencia de Metropolitanos españoles celebrada los días 10–13 de noviembre de 1937”, en V. Cárcel Ortí (ed.), *Actas de las Conferencias de Metropolitanos españoles (1921–1965)*, Madrid, BAC, 1994, pp. 390–391.

17) M. Vázquez Astorga, “Los monumentos a los caídos. ¿Un patrimonio para la memoria o para el olvido?”, en *Anales de historia del arte*, núm. 16, 2006, p. 290.

教であるゴマ枢機卿のもとを訪れ、ファランヘ党のリーダーであったホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラらの葬儀をスペインの全教会で営むこと、また彼の名を先頭に載せたうえで、各教区教会に殺害された教区民の名を刻んだプレートを教会堂の外部に掲げることを提案した。これに対し、ゴマ枢機卿は教皇庁大使に報告・相談するとはしたものの、葬儀についてはおおむね了承した。しかしながら戦没者の名を刻印するプレートをかけることに関しては、内戦が終結するのを待つように提案している¹⁸⁾。

しかしファランヘ党はこの意見を取り入れず、自分たちの内なる死者を祈念し永久不滅の存在とするための行動を早速実行に移した。そうして、フランコ陣営では、1938年11月16日法令により、11月20日をホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラらの銃殺刑を祈念し服喪する日とすること、また各教区教会の壁に、進行中の「聖戦」またはマルクス主義革命の犠牲となって死亡した教区民の名を入れた碑文を教会の合意を得て掲げることが定められた¹⁹⁾。1939年8月になると、記念碑建立には内務省による許可が必要であるという命令が出されたのであった²⁰⁾。このように表向きは戦没者を祈念する方法に関する国家統制が進んだ。

2. カトリック教会はどのように内戦を祈念するか：石板プレートを例に

よって、スペインのさまざまな地域に現存する記念碑の製作では、ファランヘ党という政治勢力が指導力を発揮する一方で、カトリック教会の事業への協

18) “Anexo 4 a Documento 12-140: Resumen de la visita al card. Gomá de D. Julián Pemartín, vicesecretario del Movimiento para proponerle funerales nacionales en el aniversario de la muerte de José Antonio, lápidas conmemorativas en las iglesias y acuerdos para la asistencia espiritual a la Falange. 13. X. 1938. Sección: 1ª. Legajo: B. Carpeta: II. Documento: 49.”, en J. Andrés-Gallego y A. M. Pazos, *op. cit.*, v. 12, Madrid, CSIC, 2009, pp. 214-215.

19) J. Casanova, *op. cit.*, p. 47. このころにはフランコ陣営では「聖戦 (Cruzada)」という単語が頻繁に使用されるようになっていた。

20) M. Vázquez Astorga, *loc. cit.*

力が求められていたと考えるべきである²¹⁾。では、ここからは、マドリードの教会施設に掲げられた記念碑のなかから、現存する石板プレート (lápidas) をいくつかとりあげ、その文言を比較・考察することで、記念碑をめぐる戦没者祈念の実例を提示したい。

2-1. サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・カラバンチェル教区教会

時間の経過とともに建立時期等の詳細が不明となったケースが多いなか²²⁾、建立時期が判明している好例として、サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・カラバンチェル教区教会の所有する石板プレートを挙げたいと思う²³⁾。マドリード南西部、市街地からみてマンサナーレス川の対岸に位置するこの教区は、現在の行政区域としてはカラバンチェル区 (districto) のオパニエル地区 (barrio) に属する²⁴⁾。このカラバンチェル区は、現在でこそマドリード市で最も人口の多い区であるが、1930年代にはマドリード市内区には組み込まれておらず、郊外の「村」として位置づけられていた²⁵⁾。

内戦勃発当初から共和国陣営が支配したこの教区周辺の地域は、マドリード包囲戦の最前線付近に位置していた²⁶⁾。内戦中は、共和国陣営によって教会堂は破壊され、主として民兵によって組織されたラ・パシオナリア大隊の司令部として使用されたのであった。しかし、内戦終結から時間をおかず、1940年3

21) このような戦没者を祈念するための記念碑等の建築許可に関連する各地の文書がアルカラ・デ・エナーレスにある総合行政文書館 (AGA) に保管されているが、これまでのところ、以降本稿で取り上げる3例に関する文書は発見できていない。

22) 現在、マドリード大司教区の文書館には、教会・その関連施設に建造された内戦を祈念する記念碑等のリストは存在しないとされている。

23) 教区の現住所は c/ General Ricardos, 21. 28019. Madrid.

24) 教区の現在の活動等に関しては、以下のホームページを参照されたい。http://www.parroquiasanmiguelarcangel.es/ (最終アクセス日: 2012年1月31日)

25) 1945年から1954年の間にマドリード市周辺にあったいくつもの村が区として市に新たに組み込まれた。カラバンチェル区のマドリード市への合併もその一例である。P. Montoliú Camps, *Enciclopedia de Madrid*, Barcelona, Planeta, 2002, p. 78.

26) J. Cervera Gil, *Madrid en Guerra. La Ciudad clandestina, 1936-1939*, Madrid, Alianza Editorial, 1999, pp. 64-65.



(写真1)

月にはこの教会堂は再建された。というのも、新たにマドリード市内に組み込まれたこの区域には労働者が居住できる住宅を建設せねばならず、彼らの精神的支柱となる教区教会を整備する必要があるという政治的な配慮があったからであった。

1940年3月28日、マドリード「解放」1周年を記念する一連の行事のなかに、サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・カラバンチェル教区教会堂の再建を祝う式典も組み込まれた。戦線において神とスペインのために命を落とした英雄たちを称える大理石でできた石板プレートが聖別され、教区教会堂正面出入口上部にあたる鐘楼の壁の時計の下に掲げられた²⁷⁾。この石板プレートには図

27) “200.000 personas ofrecen al Jefe del Estado ante el Palacio de Oriente su inquebrante adhesión”, en *Ya. Diario gráfico de la mañana*, núm. 310, 29 marzo 1940, p. 1.



(写真 2)

案意匠はなく、「神とスペインのために己の命をこの前線で捧げた英雄・殉教者の名誉を祈念して」²⁸⁾ という文言が白く四角い大理石に刻まれた (写真 1)²⁹⁾。また、教会堂の主要出入口付近、向かって右側の壁には、教会堂の建設が、内戦下で破壊された建造物等の再建を行い、国家を再生することを目的として設置された荒廃地域庁によるものであることを示す「荒廃地域庁、1940 年」³⁰⁾ という文言とフランコの勝利・凱旋を意味するシンボルマークが刻まれた石板

28) 原文は以下の通り。“Honor a los héroes y mártires que en este frente de guerra dieron su vida por Dios y por España.”

29) 本論文中で使用する写真は全て筆者が撮影したものである。

30) 原文は以下の通り。“Dirección General de Regiones Devastadas. Año 1940.” なお、フランコ体制による内戦後の文化遺産等の再生事業については以下の文献を参照されたい。D. Viejo-Rose, *Reconstructing Spain Cultural Heritage and Memory after Civil War*, Eastbourne, Sussex Academic Press, 2011.

プレート（写真2）が配置されている³¹⁾。

この教区教会堂再建の記念式典実施にあたっては、マドリード市役所とファランヘ党マドリード支部が中心的役割を果たした。1940年3月28日午前9時、マドリード・アルカラ司教エイホ・イ・ガライが教区司祭のマルティネス・バルドをともなって教会堂を聖別し、式典が始まった³²⁾。当時の内務大臣セラノ・スニエルを筆頭に、法務大臣ビルバオ、荒廃地域庁長官モレノ・トレス、建設庁長官ムグルサ、マドリード軍知事サエンス・デ・ブルアガ、マドリード県議会議長アサス侯爵、ファランヘ党マドリード県長官フォクサ、スペイン赤十字社長バリエリャノ伯爵、といった、政治家や軍人が列席した。式典では右手を伸ばして斜め上に掲げるファシスト的挨拶・敬礼が用いられ、除幕によって前述の石板プレートがその姿を現すと、内務大臣セラノ・スニエルが「神とスペインのために没した者たちよ！」と叫び、地区のファランヘ党員をはじめとする聴衆が「ここにあり！」と大声で叫びながら返答する、といった場面もみられた³³⁾。

このように、戦火にあって一度は破壊された宗教的建造物を再建し、また内戦における戦没者を愛国的な死者として祈念するにあたって、「新国家」スペインはカトリック教会の協力を必要とし、その典礼方式を利用したのである。こうして、内戦直後の社会で、カトリック教会はフランコ政権との協力関係を築くこととなった³⁴⁾。

とはいえ、次項目で指摘する石板プレートのように、政治権力との摩擦の存在を感じさせる石板プレートを飾る教区教会も存在する。

31) また教会堂内部の交差廊には「サン・ミゲル教会は赤の支配によって破壊され、国民的スペインによって再建された。神を称えよ。本司教区司教、レオポルド・エイホ・ガライ閣下によって聖別された。1940年3月28日。（“Iglesia de San Miguel, destruida por la dominación roja, reconstituida por España nacional. Laus Deo. Bendecida por el excelentísimo señor Obispo de esta diócesis, don Leopoldo Eijo Garay, 28 marzo 1940.”）」という碑が置かれたとされるが、2011年9月の訪問時には確認できなかった。

32) “La nueva parroquia de San Miguel”, en *ABC*, núm. 10637, 29 marzo 1940, p. 8.

33) *Ya, loc. cit.*

34) F. Erice Sebares, *Guerras de la memoria y fantasmas del pasado. Usos y abusos de la memoria colectiva*, Oviedo, Eikasía, 2009, p. 142.

2-2. コンセプション・デ・ヌストラ・セニョーラ教区教会

では次に、マドリード市内中心部に位置するコンセプション・デ・ヌストラ・セニョーラ教区教会³⁵⁾の石板プレートを例として取り上げよう。この教区教会はプエナビスタ区サラマンカ地区という中間層以上の社会層に属する人々が多く住み、またブランド店が軒を並べる商業地区として発展した地域の中心部にある。内戦下のマドリードとしては、共和国陣営に秘密裏に敵対する人々の居住する割合が高かった地域であった³⁶⁾。また、包囲戦の最中には、戦渦を生き残った聖職者たちの保護・援助活動を行う聖職者白色援助団体 (Socorro Blanco Sacerdotal) という団体がこの地区で結成されたことから、カトリック教会と密接な関係をもつ人々の居住割合が高かった地域であったともいえる³⁷⁾。

この教区教会は、観光地としても有名なレティエロ公園やアルカラ門に程近い場所にあり、ゴヤ通りとヌニェス・デ・バルボア通りの交差する角地に位置する(写真3)。現在、ゴヤ通り側に面した教会堂主要出入口付近の外壁には、大理石でできた1枚の石板プレートが掛けられている(写真4)。このプレートには、ファランヘ党のリーダー、ホセ・アントニオを称えると同時に、死亡した教区民に一般的に言及する「ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラ、神とスペインのために没した教区民たち、ここにあり！」という典型的な文言をはっきりと読み取ることができる³⁸⁾。

しかし、この石板プレートとは別に、ひとたび教会堂に入ると、主要出入口付近、主祭壇に向かって左側の壁の上部に大きな三連石板プレート(トリプティカ)が掲げられているのが見える(写真5)。この三連石板プレートの材質は強く灰色がかった石であり、大理石ではない。三連のそれぞれの石板には上の部

35) 現住所は c/ Goya, 26. 28001. Madrid.

36) J. Cervera Gil, *op. cit.*, pp. 158–159. 共和国陣営に対して離反し、地下活動を行ったマドリードの人々に関しては、この文献が社会学的視点による分析に詳しい。

37) c/ Diego de León, 25 にあったアパートで結成された。J. Albertí Oriol, *La Iglesia en llamas. La persecución religiosa en España durante la guerra civil*, Barcelona, Ediciones Destino, 2008, p. 447.

38) 原文は以下の通り。“José Antonio Primo de Rivera. Feligreses caídos por Dios y por España. ¡Presentes!”



(写真3)

分に宗教的意匠のレリーフがある。中央の石板上部にはアクション・カトリカのシンボルマークが刻まれ、そのすぐ下には『旧約聖書』知恵の書第3章7節の「主の訪れるとき、彼らは輝き渡り、わらを焼く火のように燃え広がる。」³⁹⁾が引用されている。また三連石板プレート向かって左側の石板上部にある棕櫚の枝、そして右側の石板上部にある月桂樹の枝のレリーフは、プレートに名前

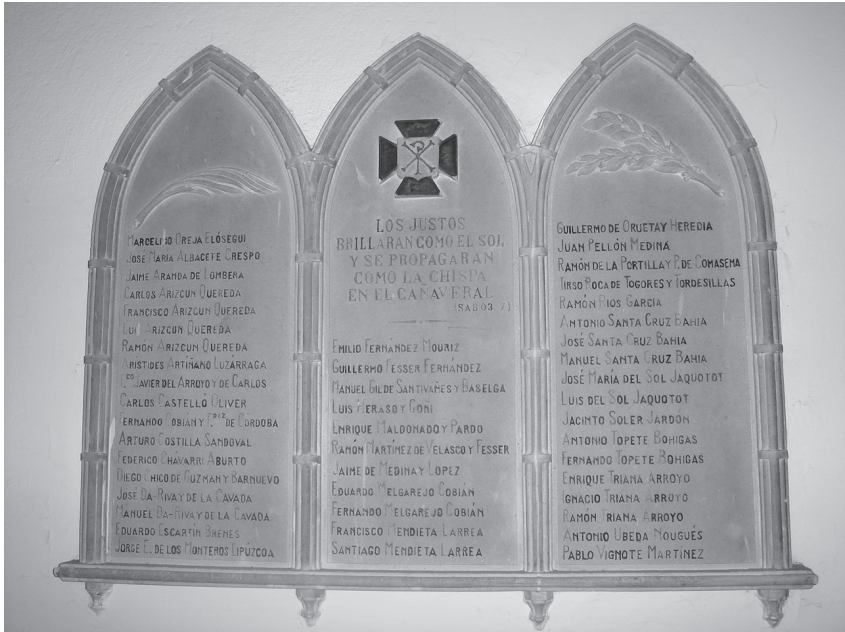
39) プロテスタントでは旧約聖書外典とされる「知恵の書」からの引用であるが、カトリックにおいては現代でも死者を追悼するミサなどでよく用いられる聖句である。なお、本稿における聖書の引用文は『聖書新共同訳・旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1990年に基づいている。



(写真4)

を刻まれた人々の犠牲と殉教の尊さ、そしてイエス・キリストにあつての復活を象徴する図像であると考えることができる。そしてそれぞれのプレートの下部には、左側石板から右側へむかって、最上位にあるマルセリーノ・オレハ・エロセギ (Marcelino Oreja Elósegui) の名を筆頭に、全47名の氏名が第1苗字のアルファベット順で連なる⁴⁰⁾。これらのなかには、第1苗字・第2苗字とも同じであることから兄弟であると判断できるケースが含まれている。以上の点から、この三連石板プレートは、かつてアクシオン・カトリカの教区センターに所属していた戦没者を祈念し、彼らの死を悼む目的を持っていたことは明ら

40) 47名全てが男性名である。アクシオン・カトリカの男性成人組織は共和国末期になってから具体的な活動がやっと開始され、内戦直前まで大きな動きにはなっていなかったことから、この47名はアクシオン・カトリカ青年部のメンバー、もしくはその関係者であったと判断してよいであろう。



(写真 5)

かである⁴¹⁾。

とはいえ、教会堂の外部と内部にかけられたそれぞれの石板プレートの製作・設置時期は不明である⁴²⁾。また、同じ教会堂に存在しながら、製作材料や現状での設置場所等に明らかな差異が見られることを考慮すると、2つの石板プレートには製作意図における連続性・統一性があったのかどうか、不明瞭であると言わざるを得ない。しいていうならば、このように2枚の石板プレートに分かれていることで、教区外部に向かってはファランヘ党の指導者たるホセ・アントニオの存在を承認し賞賛しながらも、実際にはカトリック的な資質の高かつ

41) 7組の同じ苗字をもつ人々の内訳を、苗字に続けて人数を()内に示し、以下に指摘する。アイスクン・ケレダ(4名)、ダ・リバ・イ・ラ・カバダ(2名)、メルガレジョ・コビアン(2名)、メンディエタ・ラレア(2名)、サンタ・クルス・バイア(3名)、トベテ・ボイガス(2名)、トリアナ・アロヨ(3名)。

42) 2009年9月2日のインタビューにおける司祭の言による。

た政治的人間を教会堂内部の三連石板プレートの筆頭に据え、教区民が祈念すべきはこちらの47名であると暗示していると考えることができよう。少なくとも、アクション・カトリカのメンバーに対してはファランヘ党のそれとは異なる形で追悼を行ってしかるべきであるという意志を表明しているかのようなのである。

ここで三連石板プレートに名前が挙がる人物に目を向けてみよう。まず、47名の筆頭に名前が挙がるオレハ・エロセギについて述べておきたい。彼は実際には内戦中ではなく、第二共和国期の1934年10月に左派が起こした武装蜂起、アストゥリアス革命で殺害された。1896年バスク地方、ビスカヤ県のイバランゲーラで生まれ、法学を修め、弁護士となる。大学在学中はカトリック学生連合の全国書記長を務めた経験を持ち、また1926年には第4回国際カトリック青年大会にスペイン・カトリック青年会の代表として参加した。カトリック全国布教者協会(ACNP)の正会員として積極的な活動を行い、またカトリック出版社が発行していた日刊紙『エル・デバーテ(討論)』でも執筆活動を行うなど、「よきカトリック平信徒」としての人格形成過程を経て、第二共和政期にはビスカヤから国会議員に当選。伝統主義者のイデオログまた右派の論客として頭角を現したが、前述したとおり、アストゥリアス革命下のバスク地方モンドラゴンで左派に連行され、殺害された⁴³⁾。

このように石板プレート筆頭に名のあるオレハ・エロセギの「よきカトリック平信徒」としてのプロファイルを再定置すると、この教区教会堂の石碑は新国家創設をめざすファランヘ党のイデオロギーにのみ基づいて作成されているのではなく、あくまでカトリック教会が重視する傾向が強かった伝統主義と、死者たちの「よきカトリック平信徒」としての功績を称えるために作成されたと読むことが可能になる。

43) C. Watanabe, *Confesionalidad católica y militancia política: La Asociación Católica Nacional de Propagandistas y la Juventud Católica Española (1923-1936)*, Madrid, UNED, 2003, pp. 88-89. なおオレハ・エロセギが殺害された時に妻が宿していた子供が、フランコ独裁後の民主主体制下で国会議員を務めた国民党の重鎮の一人であるマルセリーノ・オレハ・アギーレである。この点については以下を参照せよ。A. Palomino, 1934. *La guerra civil empezó en Asturias*, Barcelona, Planeta, 1998, p. 304.

また、オレハ・エロセギを除き、三連石板プレートに氏名が載るうちの14名は、フランコ陣営側が行った戦争責任追及裁判、いわゆる「一般訴訟」の資料のなかに彼らの死に関する文書があることから、左派による殺害の犠牲者であると判断できる⁴⁴⁾。他方、残る32名の死がどのように起こったのかは不明である。実際のところ、マドリード以外の地域で共和国陣営の暴力によって死亡した可能性もあれば、また従軍し戦線で戦って死んだという可能性も皆無ではなく、彼らの政治思想自体も不明であり、現時点ではこれ以上の踏み込んだ分析はできない。一方、この教区教会に属していた聖職者が8名も内戦下で殺害されているのだが、彼らの名前はこの47名のなかには含まれない。また現在、この教区教会堂のどこにもこれらの聖職者を祈念する石板プレート等の記念碑は存在しない⁴⁵⁾。

2-3. サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・フエンカラル教区教会

戦没者の十字架と石板プレートという建造物の組み合わせで戦没者を祈念する例も多く存在する。次にサン・ミゲル・アルカンヘル・デ・フエンカラル教区教会の例を見てみよう⁴⁶⁾。現在ではエル・パルド・フエンカラルという独立した区となっているが、1930年代のフエンカラルはマドリード市郊外の村として位置づけられており、今でも静かな街並みが当時の面影を残している。この教区教会では、教会堂の外の敷地内に戦没者の十字架が建てられている(写真6)。この戦没者の十字架の胴体中間部分には、「ここにあり！ 1936-1939年」⁴⁷⁾の

44) ホセ・マリア・アルバセテ・クレスポ、ハイメ・アランダ・ロンブレア、カルロス・カステリョ・オリベール、ディエゴ・チコ・デグスマン・イ・バルヌエボ、ギリエルモ・フェセル・フェルナンデス、ラモン・マルティネス・デ・ベラスコ・イ・フェセル、ファン・ペリヨン・メディナ、ラモン・デ・ラ・ポルティエーリャ・イ・パラウ・デ・コマセマ、アントニオ・トペテ・ボイガス、フェルナンド・トペテ・ボイガス、エンリケ・トリアナ・アロヨ、イグナシオ・トリアナ・アロヨ、ラモン・トリアナ・アロヨ、アントニオ・ウベダ・ノウゲスの14名。C. Vidal, *Checas de Madrid. Las cárceles republicanas al descubierto*, Madrid, Debolsillo, 2003, pp. 305-358.

45) J. L. Alfaya, *op. cit.*, pp. 283-310. マドリード・アルカラ司教区に所属し殺害された聖職者のリストが挙げられている。

46) 現住所は c/ Islas Bermudas, 28. 28034, Madrid.

47) 原文は以下の通り。“¡Presentes! 1936-1939.”



(写真6)

文言が彫られた別の石板プレートが装着されている。その下にはもう一枚別の石板が装着されているが、そこに文字が彫られている様子はない。

また十字架の奥にあたる教会堂の壁には、飾り縁の彫られた大きな石板プレートが1枚、釘で打ち込まれている。石板プレートの上部には小さな十字と1936-1939年という年代が刻まれ、その下の部分に死亡した教区関係者の氏名が連なる。また石板プレートが一番下の部分には「神と祖国のための戦没者よ、ここにあり！」⁴⁸⁾というスペインのファシスト的ともいえる典型的な文言がみられる(写真7)。こちらのプレートには少なくとも62名の氏名が刻まれているが、消えかかっている部分もあり、氏名を全て肉眼で確認することは不可能であった⁴⁹⁾。

48) 原文は以下の通り。“Caídos por Dios y por la Patria. ¡Presentes!”

49) マドリード市の記念碑に関するデータベースには、カトリック教会が所有する記念碑の一部は登録されているが、記念碑自体が公的機関の所有するものではないため、情報の公開が進んでいないのが現状である。コンセプション・デ・ヌストラ・



(写真7)

おわりに：今後の展望にかえて

第2次世界大戦における枢軸国側の敗北とともに、1940年代半ば以降、カトリック教会で行われていたファシスト的な戦没者追悼式典は影をひそめていった。また内戦終結25周年を境に、内戦の戦没者を特別に祈念する行事も減少し

セニョーラ教区教会と、サン・ミゲル・アンヘル・デ・カラバンチェル教区教会の記念碑については前述のデータベースには記載がない。また、サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・フエンカラル教区の記念碑の場合、制作年や所有者などといった、このデータベースで本来は記録される基本的内容に関する記録情報の多くが抜け落ち、不明である。http://www.monumentamadrid.es/AM_Monumentos4/AM_Monumentos4_WEB/pdf/pdf/mon7/n0511.pdf（最終アクセス日：2012年1月19日）

た。石板プレートのような内戦を祈念する石碑は、最近まで、内戦の記憶を自身の内にとどめ、沈黙のなかに立っていた。その眠れる記憶を呼び起こしたのは、まさに前述した「歴史的記憶法」であった。

「神と祖国のために死んだ戦没者」といった文言は、それを使用するだけで共和国陣営の人々を排除し、内戦の勝者フランコを称揚することにつながると理解されている。しかしながら、そのような戦没者を各陣営ごとに分類するだけの二項対立的な理解では判断しきれない状況が存在することが近年明らかになりつつある。従来は、カトリック教会の保有する石板プレートにその名を刻まれた人物はフランコ陣営の戦没者と考えられてきた。しかし、実際にはフランコ陣営と共和国陣営の双方の戦没者の名が刻まれている場合もあることが判明した⁵⁰⁾。

マドリードの3例でみた石板プレートの形態や設置場所の例からは、フランコ政権が定めた記念碑に関する統一的設置基準は、実は政権の意図したとおりには機能していなかったことがわかる。このような現実には戦没者のための記念碑を体制を称える造形芸術のひとつとして用いようとする独裁体制側の政治的思惑と、死者を祈念する伝統的形式のひとつととらえるカトリック教会とのあいだの意識のずれによってもたらされたと考えることができよう。

既に述べたとおり、カトリック教会に掲げられている石板プレート撤去の是非をめぐる、社会的コンフリクトは確かに現存する。サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・カラバンチェル教区教会の鐘楼時計下にかかる石板プレートの表面の損傷はひどく、現在では文言は肉眼ではほとんど判別できない(写真8)。雨風を避ける余地のない場に掲げられているとはいえ、石板プレートに残る縦横線の傷には人為的なものさを感じられる。またサン・ミゲル・アルカンヘル・デ・フエンカラル教区教会では、戦没者の十字架と石板プレートは、鉄格子で囲まれた場にあり、その入り口には鍵が掛けられている(写真9)。教区教会事

50) たとえば、アラゴン自治州ベラ・デ・モンカヨ村の教区教会堂の主要出入り口壁上部に架けられた石板プレートがその例である。2011年8月19日のインタビューにおける教区司祭の証言による。



(写真8)

務局が開いている時間帯も短く、教会堂自体無人であることが多いことから、この鉄格子は、「悪意」による記念碑の損傷を防ぐためにとられた措置と理解するべきであろう。

なぜ石板プレートを撤去しないのかという日刊紙ABCの問いに対して、2007年10月、サン・ミゲル・アルカンヘル・デ・カラバンチェル教区の教区司祭は、「ロドリゲス・サパテロ首相はこの問題をめぐってはまったく不条理なことをしている。私たちは司教から通達があるまで、何一つ撤去するつもりはない。」と発言した。またコンセプション・デ・ヌエストラ・セニョーラ教区教会の聖職者の1人は、「壁に石板プレートを残すかどうか聞いてくる人々は、いったいなんと言って欲しいというのだろう。歴史を忘却しないことが大切なのであって、社会が健忘症に陥るほうがもっと悪い。」と述べている。このような彼らのことばは、カトリック教会のなかで石板プレートを撤去しないとする派の



(写真9)

言い分を端的に表している⁵¹⁾。

一方で、カトリック教会内で内戦の記憶の書き換えが起こっている事実にも注目しなければならない。1980年代後半以降、教皇ヨハネ・パウロ2世のもとで列聖・列福の動きが促進されるとともに、スペイン内戦で死亡した聖職者や平信徒のなかからも、殉教者として列聖・列福される人々が多く出ている。殉教者である彼らを福者・聖人に選定して祈念の対象とし、教会堂の内部という「私的な」空間に新たな記念碑を建造する。このような措置を通じて、「よきカトリック」平信徒・聖職者として死んでいった者を、カトリック教会の「内なる死者」として特別に思い起こす現在の現象がみられる。たとえば、マドリー

51) “Memoria histórica. El gobierno reabre las heridas”, en *ABC*, núm. 33539, 12 octubre 2007, p. 18.

ドのラ・ミラグロサ教区教会⁵²⁾、ヌエストラ・セニョーラ・デ・ペルパトゥオ・ソコロ教区教会⁵³⁾、などがその例にあたる。教区に関係した聖職者を主な対象としてあらたに石板や金属板でできたプレート等の碑を建て、殉教者としての彼らにミサを捧げて祈るのである。このような現状から、カトリック教会は、伝統的な形態を守りつつ、スペイン内戦を新たに祈念しようと試みているようにみえる⁵⁴⁾。

内戦から今日まで、記念碑を建造することをとおして死者を記憶しようとする点では、カトリック教会の思想と方法にはある種の連続性がみられる。とはいえ、そのような記憶を維持せんとする方向性が、カトリック教会全体を代表するスペイン内戦をめぐる集合的記憶のあり方だと考えるのは時期尚早である⁵⁵⁾。戦後 70 余年を経ても内戦の記憶をどのように歴史化していくのか、という問いへの答えは出ていない。研究者には、内戦の実相を明らかにする地道な調査研究が求められている。

52) 現住所は c/ García de Paredes, 45, 28010, Madrid.

53) 現住所は c/ Manuel Silvera, 14, 28010, Madrid. 教区のホームページは以下を参照されたい。http://www.perpetuosocorro.org/madrid/ (最終アクセス日: 2012 年 1 月 31 日)

54) 「内なる死者」を、信仰をもったという理由で殺された殉教者として新たに祀ろうとするスペイン・カトリック教会の姿勢については以下の文献、特にその第 4 部を参照されたい。V. Cárcel Ortí, *Caidos, víctimas y mártires. La Iglesia y la hecatombe de 1936*, Madrid, Espasa Calpe, 2005.

55) 2010 年 6 月にメールおよび郵送にて、マドリードの全教区教会を対象に実施したアンケート調査への回答に記された文面からは、現在の若い世代の聖職者のなかには、内戦の記憶を回復しようとするカトリック教会に対して懐疑的な思考があることがわかる。たとえば、パウティスモ・テル・セニョール教区教会の聖職者による以下の文面がその好例であろう。「この教区は 1982 年にできた。劇的なスペイン内戦からはずいぶん時間がたってからのことだ。だから、この教区は内戦を経験していないし、それを想起させるようなプレートはない。我々聖職者も若く(教区司祭は 39 歳、助祭は 26 歳)、スペインのその悲しい歴史を知りたいとはあまり思わない。」

本稿は、平成 21-23 年度科学研究費補助金「宗教と国家：スペインにおける戦争犠牲者の祈念をめぐる一考察」(課題番号 21510296) による研究成果の一部である。